

熊本県立宇土高等学校 平成30年度(2018年度)学校評価表

| |
|--|
| <p>1 学校教育目標</p> <p>熊本県教育委員会の「平成30年度県立中学校・高等学校における教育指導の重点」及び「平成30年度人権教育取組の方向」等を中心に据えながら、本校建学の精神である「質実剛健」のもと98年の伝統を継承しつつ、中高一貫教育校として新たな発展と創造をめざす。 全職員は教育者としての自覚と使命感、教育的愛情と人権感覚を持ち、資質と指導力の向上に努め、生徒一人ひとりの個性を伸ばしながら、知・徳・体の調和が取れ、自ら学び、自ら考え、自ら行動し、たくましく生きる力を備えた将来のリーダーとなる青年の育成に努める。 中高一貫教育校としての利点を生かし、効果的な教育のあり方を研究するとともに、地域との連携をより一層深め、地域に開かれた特色ある学校づくりに努める。</p> |
|--|

| |
|---|
| <p>2 本年度の目標</p> <p>①全職員が、資質と指導力の向上に努め、生徒一人一人を理解し、その個性を伸ばしながら、知・徳・体の調和が取れ、自ら学び、考え、行動する、たくましく生きる力を備えた将来のリーダーを育成する。 ②中高一貫教育校として、魅力ある教育課程の研究を推進し、宇土校ならではの教育活動を展開する。 ③地域との連携をより一層深め、地域に開かれた特色ある学校づくりに努める。</p> |
|---|

| 評価項目 | | 評価の観点 | 具体的目標 | 具体的方策 | 評価 | 成果と課題 |
|--------|---|-----------------------------------|--|---|----|---|
| 大項目 | 小項目 | | | | | |
| 学校経営 | 生徒一人一人を理解し、その個性を伸ばしながら、知・徳・体の調和が取れ、自ら学び、考え、行動する、たくましく生きる力を備えた将来のリーダーの育成 | 生徒一人一人に対する深い理解と、個々の特性を生かした活動の場の設定 | 校務のスリム化による生徒と接する時間増20% | ・職員朝礼を週2回から1回に縮小する ・6限授業時の7限目相当時間帯を活用する | B | ○働き方改革に伴う校務の見直しを、生徒・職員の現状を把握した上で行った。 ○緒に就いたばかりのものもあるが、今後も継続して行うことで意識の改革につなげたい。 |
| | | | 個々の生徒の理解度に応じた学習指導の実践 | 研究授業・公開授業を見直し、少人数グループによる研鑽ができるようにする | B | ○SSH全校展開の主軸は、授業を受ける生徒が常に「なぜ？」という視点をもって授業に臨むことにある。今年度の実践をベースに厚みを増す取組に進化させたい。 |
| | | | 生徒の主体性を育むための学習環境の抜本的見直し | 新たな入試制度に対応するために、授業改善を目的とした職員研修を実施する | C | △取組の趣旨を生徒に十分理解させることができなかった。希望制というキーワードが生かせず、生徒が易きに流れた。 |
| | 地域に開かれた特色ある学校づくり | 丁寧な広報と入学者選抜における志願者増 | 宇土中卒業生の100%宇土高入学、後期選抜における志願倍率1.2倍 | ・高校説明会の内容を見直し、改革部分は職員から丁寧に説明する。 ・一昨年から数を減らした中学校へピンポイントで訪問する。 | C | △本校の良さ、魅力が中学校や地域に十分に伝えきれなかった感がある。生徒が楽しく充実して学校生活を送ることが何よりも効果があることを再認識した。 |
| 学力向上 | 授業の充実と学習意欲の向上 | 全ての生徒が意欲的に授業に参加する授業の実践 | 生徒の理解度及び満足度90%以上の達成 | ・行事の見直し ・研究授業の改善 ・探究型授業の取組 ・ICT活用の推進 | A | ○全教科において探究型授業が取り入れられ、授業改善が進むとともに視察も大幅に増加した。 ○探究型授業により、生徒の授業に取り組む姿勢や授業満足度は高まっている。 |
| | 自学力の育成 | 宅習時間の確保と定期考査の成績向上 | ・宅習時間の確保(高1・2年＝週1000分 高3＝週1500分) ・定期考査の平均点の向上(全教科・科目で平均55点以上) | ・宅習時間調査の充実(年4回) ・授業評価の充実(年2回) ・考査期間中の学習時間の確保 | B | ○宅習時間は3年生は目標値に近いが、1・2年生は少ない。 ○生徒の自学力育成が課題であり、探究型授業にあわせて課題や宿題の内容を工夫する必要がある。 |
| キャリア教育 | 自己の発見とキャリアの基礎構築 | 自己の強み発見 | 自身の個性・強みを考えた目標設定度90%以上 | ・Nステの実践と充実 ・模試の計画と実践 ・年3回以上の面談の実施と各部会等での情報発信 | B | ・生徒が目標を明確にもち、学習習慣の確立と意欲を高める工夫が必要。学年や教科で模試を詳細に分析し、指導に生かす。 |
| | | 将来を見通したキャリア構想 | 職業を見据えた進路目標の設定度90%以上 | ・各大学オープンキャンパスへの参加の呼び掛け ・インターンシップの実施 ・進路講話、卒業生による合格体験談の充実 | B | ○オープンキャンパスや、1日医師体験・1日看護体験等に積極的に参加した。学びの部屋の参加者も190名を超え、昨年並みとなった。 |

| | | | | | | |
|-----------------|--------------------------|----------------------------------|---|--|---|--|
| 育 (進路 指導) | 一人一人の進路目標 の達成 | 進路意識の向上 | 進路LHR、進路講話 等の満足度90%以上 | ・進路学習の工夫と充 実 ・進路希望調査、進路 講話、各種講演会の実 施 ・企業訪問、大学によ る出前講座の実施 | A | ○進路学習の工夫を重ね、将来 のイメージを明確化することがで きた。 ・低学年からの系統的な進路学 習と、講演や課題研究、大学説 明会で得た情報を将来に生かす ような指導、取組を考える。 |
| | | 進路実績 | 第一希望合格を目指 し、国公立大学130人、 難関大学20人合格 | ・模試の詳細な分析 ・進路検討会の充実 ・業者による研修会、 学校説明会への参加 ・e-ポートフォリオの周 知と活用 | A | ○高校での課題研究を生かした AO入試等で過去最高の進学実 績を上げることができた。 宅習時間結果、模試分析を関連 付けて主体性が育っているかど うかや授業の検証し、e- Portfolioの活用を考える。 |
| 生徒 指導 | 基本的な生活習慣の確 立 | 服装・あいさつ・掃除の 徹底 | 全職員による生徒指導 と生徒に寄り添った配 慮ある対応の実践、充 実度80%以上 | ・全ての指導における 「凡事徹底」の意識涵 養 ・学年集会時の整容検 査と事後指導の徹底 ・生活委員会によるあ いさつ運動の実施 | B | ○服装検査等の学年の温度差 も無く、学期2回実施できた。 ○あいさつ運動もPTAと協力し て実施できた。 ・時期を検討する必要がある。 |
| | | 交通ルールの遵守とマ ナーの向上 | 交通ルール遵守率 80%以上、交通事故・ 苦情0件 | ・定期的な交通指導 ・啓発用のチラシの作 成と掲示 ・交通安全教室の実施 | B | ・交通指導は引き続き徹底を図 り、生徒が加害者にも被害者 にならないよう取り組みたい保 護者及び地域住民の方から信頼 されるよう努力したい。 |
| | 自主性や社会性及び 公共性を身につける | 生徒会中心の行事の 運営 | 生徒会主催の行事の 企画・運営の充実、ア ンケートによる満足度 90%以上 | 体育祭、文化祭、クラ スマッチの見直しと、よ り一層の充実 | B | △体育祭、文化祭ともに内容検 討が必要である。 ○クラスマッチの見直しは大変 良かった。 |
| | | 各種委員会活動の活 性化 | 目標の明確化、生徒自 ら動く委員会活動の実 践、達成感90%以上 | ・生徒会執行部の主体 による各種委員会の開 催と合同会議の企画・ 立案 ・各種委員会の主体的 な活動による活性化 | C | ○体育祭・文化祭などの各行事 における委員会活動は充実し た。 △年間を通した、継続的な各委 員会の活動を啓発する機会が 必要である。 |
| 人権 教育の 推進 | 命を大切にすることを育 む指導 | 他人を思いやり、いじ めや差別を許さない態 度の育成 | 人権意識、自尊感情の 向上、自己肯定感90% 以上 | 全教科・全領域におい て、教師はもちろん生 徒相互間でも認め褒め 励ます教育活動に取り 組む。 | C | いじめの件数について高校では 7件、中学では11件あった。学 校として認知したものは高校2 件、中学0件だった。継続性はな いが、学校全体でいじめを起こ させないための環境づくりなど予 防的取組がより一層必要であ る。 |
| | 職員研修の充実 | 人権教育の基本的認 識の確認と実践力の向 上 | 職員研修の実践、校外 の研修に全員参加、人 権教育に関するレポー トの全員作成 | 教育実践の相互研鑽 を行い、人権問題に関 する深い認識と実践力 を併せ持った教職員集 団づくりに取り組む。 | A | ○人権教育の職員研修を校内 外とも機会を設け、有意義な研 修を行うことができた。職員に 人権レポートを書いてもらう教育 実践の交流研修の取組では昨年 度よりも提出率が向上した。 ○人権問題に関する深い認識と 実践力を併せ持った教職員の集 団づくりに資する取組ができた。 |
| 特別 支援 教育 | 特別な支援を必要とす る生徒への的確な対応 | 生徒の特性に合わせ た支援 | ・生徒理解を踏まえた 適切な支援の実践 ・個別の教育支援計画 及び指導計画を基にし た支援の充実 ・不登校傾向の生徒へ の支援と、カウンセラ ー室の効果的な活用 | ・特別な支援を要する 生徒に対する全職員の 共通理解を図り、環境 整備に努める。 ・保護者やSC、SSW を始め外部専門機関と も協力・連携を図りなが ら、サポート会議や ケース会議を開催する など、組織的な支援を 進める。 ・外部講師による職員 研修を実施する。 | B | ・個別の教育支援計画及び指導 計画の作成が進まず、継続的な 支援の基としての活用ができな かった。 ・生徒や保護者の困りが起きて からの事後対応に終始すること が多く、日頃からの支援の充実 を図って、困りが具現化する前 段階での予防的な支援が更に 必要であった。 |

| | | | | | | |
|---------------------|---|----------------------------------|--|--|---|---|
| | | ストレス反応を示す生徒への支援 | ・SCとの定期的な面談の実施 ・関係機関への引き継ぎ | ・学校や寮、また家庭などの生活環境に起因するストレス反応を示す生徒をSCやSSWIにつなぎ、ストレスへの対処方を学ばせる。 | A | ○多くの生徒・保護者をSCとのカウンセリングや、その後の医療機関受診につなぐことができた。 △カウンセリングの回数・日数に限りがあり、どうしてもカウンセリング間が空いてしまうことや、カウンセリングの要望に即座に対応できないこともあった。 |
| いじめの防止等 | いじめ防止委員会主導による啓発 | いじめを未然に防ぐため、また無くすために必要な主体的な態度の育成 | 人権意識、自尊感情の向上、いじめ0(いじめ解消率100%) | いじめ防止通信を年3回発行する。いじめに関するアンケートを年2回実施。心のきずなを深める月間及び人権週間で人権作文等を読む。 | C | 今年度こそいじめの件数を「0」にするという目標を年度当初に掲げたが、結果として学校としていじめと認知する事案が「2件」発生した。 課題は「いじり」という行為と「ネット上でのトラブル」である。今後、より一層の啓発が必要である。 |
| | 職員研修の充実 | いじめに関する基本的認識の周知徹底と生徒理解力の向上 | 教職員が主体的にいじめ問題について考えることができる。アンケートへの回答100% | いじめに関するアンケートを分析した結果を共有することで、研修効果を高める。 | B | ○「心のアンケート」の生徒の意見から、生徒や職員のいじめ問題防止に対する課題が分析できた。その課題の解決に向けた具体的な実践が求められている。今後、学校全体でいじめ問題の解決に取り組むというリーダーシップと雰囲気づくりが重要である。 |
| 地域連携(コミュニティ・スクールなど) | 地域に開かれた特色ある学校づくり学校づくり | 学校評議員会の充実 | 年2回の開催と、委員の満足度を高める内容の精選 | 学校評価に関するアンケート結果の検証と対策の提示 | B | 多くの建設的な意見に答えられるように、今後具体的な取り組みが求められる。 |
| | | 地域行事への参加率の向上 | 地域ボランティア・行事の広報と周知 | ボランティアや行事への要請の周知徹底と、参加に対する柔軟な対応 | A | ○船場川清掃ボランティアに継続的に多くの生徒が参加する等、意識は高くなっている。日常生活との温度差、日頃の生活態度(挨拶・掃除)の向上が課題。 |
| | | HP・ブログ配信の充実 | 見やすいHPの作成と充実、ブログの更新週に3回以上 | ブログ入力方法の周知と記事を集める視点の涵養 | B | ○ブログ配信はタイムリーにできた。HPの担当者体制を整備しないと、情報発信が後手後手になる。 |
| | | 防災型運営協議会の充実 | 宇土市との協定書の協議 | 宇土市の防災計画と本校の役割との摺り合わせ | C | ○行事を調整し、運営協議会は1学期と2学期の2回の実施とした。地域連携の試案作りが課題である。 |
| 図書館活動 | 読書活動の活性化 | 貸出数の増加 | 生徒一人当たりの年間貸出数7冊以上 | 校内読書月間の実施(7、12月)、特設図書コーナーや展示の工夫改善 | A | ○貸出冊数は4741冊(一人当たり6.7冊)で、昨年度平均を1.1冊上回った。今後は生徒の図書委員会活動を活発化し、貸出冊数を増やしていきたい。 |
| | 探究活動の拠点としての役割強化 | 図書館の利用者数の増加 | 1日当たりの図書館来館者数150人以上 | 広報誌『らいぶらいたいむず』の定期的発行、ホームページのブログでの情報発信 | A | ○4月から1月までの一日当たりの来館者数は174.6人、授業での図書館活用時間も111時間で昨年度より倍増した。今年度は「らいぶらいたいむず」特別号で新着図書案内を行った。 |
| SSH | 第二期実践型、研究開発課題「未知なるものに挑むUTO-LOGICで切り拓く探究活動の実践」の構想具現化 | UTO-LOGICを備えた人材育成の評価方法を開発する | 全校生徒対象にL・O・G・I・C5観点を問う学校独自問題「ロジック・アセスメント」の開発 | 2学期実施に向け、SSH推進委員を中心に教科と連携して開発する | B | ○ロジック・ルーブリックとロジックガイドブックのコンテンツを関連付けたことで、生徒に身につけさせたい力は明確にできた。△育てたい生徒像の到達度を測るロジックアセスメントの評価尺度の研究に課題が生じた。 |
| | | | 探究活動を評価するロジックルーブリック、ロジックチェックリスト開発 | 第一期に開発した評価をもとに研究開発を推進する | B | ○ロジック・ルーブリック及びロジックチェックリストを活用した生徒の自己評価、他己評価を行うことができた。評価の妥当性を高めるためのロジックアセスメントとの相関関係を得る必要がある。 |

| | | | | | | |
|--------|--|---------------------------------|-----------------------------------|---|---|--|
| | 全校体制で展開する探究活動の実践及び探究の視点を授業に入れた、探究の「問い」を創る授業の実践 | 探究活動及び探究の「問い」を創る授業の実践の見える化”可視化” | 職員の指導方法及び生徒の成果を可視化する機会を多く設定する | 職員研修・成果発表会実施、研究集発行、LOGICガイドブック開発 | A | ○OJTによる職員研修の機会充実を図り、生徒の探究活動の可視化として発表会や成果物作成の充実を図ることができた。 ○GS研究主任を中心に全校体制での探究活動の推進を図ることができた。 |
| | | | 探究の「問い」を創る授業の実践を共有する機会を設定する | 公開授業及び職員研修を実施する | A | ○公開授業及び学校訪問で県内から77人、県外から41人の教職員の視察訪問があり、探究の「問い」を創る授業を校外内に強く発信することができた。 |
| 中高一貫教育 | 中高一貫教育校としての魅力ある教育課程の研究と、宇土校ならではの教育活動の推進 | 生徒情報の中高間の共有 | 中高が連携した生徒理解と支援の充実 | ・生徒理解研修の中高合同開催 ・SCとの密接な連携 | B | ○生徒理解研修の実施で、共通理解は進んだが、中学教科担当者と定期的に情報交換の場を設けるとさらに良い。 ○SCとの密接な連携で、積極的な運用ができた。 |
| | | | 進路変更者数の減少 | ・別室登校の活用 ・二者面談、三者面談、家庭訪問の頻回実施 | A | ○別室登校の生徒は、行事に参加する等、改善傾向にある。 ○3年は、定期面談以外に、進路相談等、随時面談を行い、家庭と密接に連携できた。 |
| | | 合同行事の活性化、連携した生徒会活動の実施 | 体育祭、文化祭等の合同行事における一体感の醸成と、満足度90%以上 | ・生徒会を中心とした行事の工夫と実践、全校集会の活用 ・保護者(PTA)と一体となった行事の工夫 | A | ○生徒主体の取組で、どの行事も成功を収め、生徒間の絆も深まった。 ○保護者会だけでなく、行事や授業でも参加を依頼したことは、学校理解につながった。 |

4 学校関係者評価

・定員割れの原因を多面的に分析し、情報発信の方法(HPや学校パンフレット)の見直しや、授業改善、キャリアイメージの醸成を図る必要がある。

・いろいろな取組、行事がおおいが、それをどう生かしていくかは、PDCAに基づく改善計画をより一層具体化していきながら検討をすすめ、改善する。

・宇土市内から熊本市内の高校や高専へ抜ける生徒が年々増え続けている。中学生の思いとしては「高校生では電車通学が憧れです」「現在の社会状況から就職は売り手市場だと聞くと、いつまでのこの景気が続くとも限らないので実業高校に行き資格を取って早く就職した方がよい」「宇土高は勉強ばかりで楽しそうに見えない」「地元の高校として宇土高に生きたいが、魅力を感じない」という中学生の印象を払拭するための方策が必要である。

・大学進学(その後の職業選択まで含めて)を考える必要があり、難しい対応がいくつもあると思うが、生徒たちが自分で成長したところを理解できる取組(周りの声かけも含めて)が必要。

先生方自らが、自分達の実践を高く評価するような教育環境づくりを期待したい。

・いじめを早く察知することでよりよい対処ができると思う。そのためには今以上に生徒たち一人ひとりに寄り添った指導を願いたい。

・キャリア教育に力を入れてほしい。

5 総合評価

学校行事や教育実践(SSHなど)を工夫し、外部に対し丁寧な情報発信も行っているが、勉強の大変さ、課題の負担感等が中学生に印象として伝わっている感がある。進学校として地域の期待に応えつつ、「なぜ、今学びが必要なのか?」という多くの生徒が抱えている疑問に丁寧に答えていく必要がある。多様な課題や特性を持った生徒一人一人に対して、自己肯定感を高め前進につなげるような具体的な指導に努めた。保護者の要求に苦慮する場面も見られた。

6 次年度への課題・改善策

入試制度改革や新しい学習指導要領の実施に伴い、これからの生徒に身に付けさせるべき力を職員間で共通理解し、一枚岩の体制で教育目標の達成に邁進していかなければならない。具体的な対策として、①教育課程の見直し、②日課の見直し、③探究型授業の推進に向けた教科会の充実、④学校行事の精選、を次年度の校務改革の柱として、運営委員のリーダーシップが発揮されるような組織を構築していくとともに、PDCAサイクルを確実に実践していく。